

達ナレバ学生ヲ啓発スルコト少ナカラザルベシ”とある。こののちは、呉が導入したクレペリンの体系が国内に根づいたので、ツィーエンの影響ものこらなくなった。

片山については、かなり印刷されのこっているその精神鑑定著を検討していく必要がある。

(平成26年1月例会)

書 評

森川 潤 著

『青木周弼の西洋医学校構想』

防長の医史研究は先達・田中助一が逝去して以来、寥々たる状況が続いていたが、近年、中澤淳山口大学名誉教授の牽引で新たに組織的研究が胎動しつつある。一方この流れとは別に広島修道大学の森川潤教授は、同大学の論集を中心に青木周弼に関する論文を公表、幕末萩藩の医学教育を教育文化論や教育文化交渉史の視座から分析し、興味深い論考を発表していた。これらは斯学が長い停滞期を脱し、再び学的活性化へ向かおうとする歓迎すべき動きといえる。

さて本書は萩藩医・青木周弼の医育事業の大成に至る過程を追った労作である。著者によれば周弼の登用は、能美洞庵等の藩地での西洋医学興隆の企図と、村田清風の海防を目的とする西洋軍事学導入の思惑が合致して実現したという。以後、周弼は萩藩蘭学の基盤を築き、萩藩で唯一の蘭学者の供給源となる。また世襲藩医制の弊害除去に腐心し、自由な議論と競争を前提とする会読を重視、西洋軍事学の専門家発掘や種痘実施に中心的役割を担ったとの指摘もなされる。

周弼研究は戦前の『青木周弼』を頂点とする。該書は貴重資料の宝庫である。本書も周弼関係の資料はこれに依拠する。しかしそれを利用しながらも意欲的補完に努めた結果、田中の周弼伝を上回る成果が随所に窺える。本書は毛利家文庫（山口県立文書館所蔵）を中心に関連資料を多数補填し、加えて書誌に関する知見も豊富、蘭書の解説も詳しく、周縁部への目配りが徹底され、広角的

視野の下に周弼の思考・行動に迫る。その手法はいわば周弼を核としてそこに衛生を配し、系列を整理して主星の特質を浮き彫りにする格好がとられており、これにより本書は先行書に比してより濃密な内容を持つ著作へと昇華している。

田中は周弼の藩医時代を嘉永4年を分岐点として前後期に分けたが、本書はより説得力をもって、(1) 医官兼医校翻訳掛として訳述に携わる時期、(2) 医校会頭就任～西洋学所で兵学振興に尽力する時期、(3) 侍医となって再び医校に戻り、教諭役として運営を主導する時期、に三分した。その上で各期ごとの検討事項を、(1) 坪井塾で蘭語を習得した周弼が萩藩蘭学のパイオニアとして蘭学の移植基盤を整える過程、(2) 医校会頭として起草した「医学所規則」が修正を経て制定公布される過程、及び萩藩医が伝統的に築いた漢方医学の基盤上に西洋医学を学科課程中に組み入れる過程、(3) a 参勤に随従した周弼が蘭学の先進地・江戸で果たした役割、(3) b 病没前まで精魂を傾けた建言等から見る周弼の西洋医学校構想、と焦点化して、堅牢な構成を見せる。周弼の藩医界改革は旧師・能美洞庵の後援で抵抗勢力を抑えつつ、漸進的、段階的に展開された。著者の分析によると、周弼はまず「医学所規則」で西洋医学校構想のプロトタイプを示し、「好生堂増補規則」で漢方医学を排除せず、基礎過程に位置付けて西洋医学転換への現実的選択を図り、「好生堂改正規則」で藩政府に西洋医学校設置の緊急性を建

言、その裁可(周弼没後)により萩藩医学校の西洋医学校としての骨格が完成したと、構想の全体像を提示する。読者は各章を通して、周弼の西洋医学導入への綿密な構築性と周到な戦略性に驚き、と同時に幕末長州に生きたひとりの先覚医家の高志に感銘し、必ずや充足した読後感を得るに違いない。

ところで本書には若干の誤解や疑問点が指摘できる。まず久坂玄機の生年(73頁)。著者は従来の文化10年説と文政3年説に与せず、「忠節事蹟」の文化3年説を採り、医学校都講に任命された嘉永2年は43才との新説を唱える。ただ残念ながらこれは無理がある。在坂玄機が秋本玄芝に与えた詩中に「看来たる廿九秋春を関す」(『久坂天籟詩文稿』)と見え、生年は文政3年、都講役就任時は30才と確定する。次に坪井信友(二代信道)の説明に「父の門人であった京都の広瀬旭莊」(129頁)とあるが、旭莊は大坂に僑居し、信道門人でもない。また周弼の古医方への親近感が三田尻の越氏塾で徂徠学を学んだ点に関係しようと述べる(101~102頁)が、越氏塾入門は田中の推論に過ぎず、かつ督学の吉武江陽は折衷派に近いとされ、化政期に藩営教場で徂徠学が徹底されたか

は未詳である。加えて資料の扱いにもやや難がある。著者は田中が「毛利公爵家記録」とした文書類の出典を逐一示しており、細部を忽せにせぬ姿勢には敬意を表する。しかし好意で付けた返点の過誤がままあり、また旧字体での統一を図った引用資料に新字体が混入する等も見られる。さらに『古谷道庵日乗』(80頁)と『周礼』(98頁)の引用書は適切ではあるまい。

尤も以上は評者の狷介なる性による重箱の隅つきの産物であって、いわゆる瑕瑾に他ならず、決して本書の価値を大きく損ずるものではない。末尾の付表「萩出身のおもな蘭学者」はよく工夫されて勝手がよく、人名・事項の索引も充実しており、双方から恩恵を被ることは勿論である。本書の刊行は防長医史研究にとって久しぶりの朗報となった。今後は田中の『青木周弼』との併読が不可欠の著作となろう。青木周弼及び萩藩の医育研究に転機をもたらす好著の登場を心から喜び、その成果を高く評価したいと思う。

(亀田 一邦)

[雄松堂書店、〒160-0002 東京都新宿区坂町27、
TEL. 03(3357)1446、2014年1月、A5判、304
頁、4,500円+税]

書籍紹介

家本誠一 著 『金匱要略 訳注』

本書の著者は、父親が薬剤師で漢方薬に囲まれて育ち、旧制千葉医科大学(現千葉大学医学部)卒業後、内科医院経営の側ら『傷寒論』、『金匱要略』といった東洋医学の古典を学んだ医師である。『金匱要略』を現代医学の言葉で読み替えており、東洋医学を現代の日本の医療の現場に役立てたいという強い意志が感じられる。思想史研究的な意味においては、難がないとは言えないものの、東洋医学を現代の日本の医療の現場に役立て

たい医療従事者にとっては格好の東洋医学入門書となろう。

内容

金匱要略序
金匱要略方論

金匱要略方論 巻上
臟腑経絡先後病脉證 第一